

試験を阻止しに来た学生諸君へ

1970.1.19

福井正雄

私の期待通りに諸君は来た。

私は諸君との討論の機会を渴望していた。

現在の事態について弁明的にいえば(諸君はそれを容認しないであろうか)二部の諸君はスト決議をしていない、二部の諸君とも討論の時間を設け、この状態下に試験が行なわれるべきか否かについての意思疎通はかり、しかるのちにこのことの処置を決めたかったが、残念ながらその時間は持てなかった。私は自己の信念と、これ手での座間部の諸君との討論を通して得た判断に基づき、このかたちにおいて「試験」の実施を試みることにした。以下は私の逐報告と現在の心境である。

2

私は授業再開以来今日まで2回にわたり自分の見解を表明した声明を完した。才1回のものは1/月/8日付で、「学生諸君に入稿を訴える」と題して、同日から4日間にはわたり和泉校舎正門に立って活動家と目される諸君に配布した。才2回のものは1/2月/5日付で「K、S、さんへの手紙」と題し、文学部(物理)法學部座間部(自然科学概論)同二部(同)の各授業において配布し、その他活動家と目される諸君に会うたびに出来るだけ手渡すことにしている。両方の声明は東京都立大学解放大学において開かれた松下昇氏と私との講演討論会において聴衆のすべての人に配布した。これらが両方とも1枚の諸君の手に渡ってはいないとは考えられない。

私の残念に思うことは、この両度にわたる私の声明にたいして、諸君の批判を今日まで受取っていないことである。私はこの両方において、何れ所かにかたがて諸君を挑発させた。「かれらは入稿と内部での再建を訴えた私の声明にたいして反撥してはいない、かれらは従来と同様態度で私に接してくれる、しかも私の授業時にあって私が主催する討論への参加は、ほとんど皆無である」という趣旨で。

この挑発にこえ答えてもらえないことは私にとっては大きな苦痛であつた。「科学者にはいする最大の極刑は絞首でも、火刑でもなく、黙殺である」(バナー、歴史に於ける科学)。このような諸君の「反応」のほかには、私は現在までおよそ26000篇に及ぶ、その大部分が明大闘争の評価を内容としていっているところのレポートを受け取っている。その内容を不用意に発表することは、諸君に対する最大の裏切りとなるので、もちろん人詳細には立ち入らないが、一言だけいふならば、このレポートが示す傾向から判断するに、すくなくとも人数の戦闘的要素が展開されても、それに呼応する何事かが教室の中から発生することは、ほとんど期待しえないのである。

3

私のしてきたことは僅かである。私は1/2月/7日午後の休講措置に抗議して、政経学部鈴木助教と連名で抗議書を作成し、それを校庭において発表した。私は4年次の自然科学概論の試験に「大学問題について書け」というだけの問題を出し、学部筋から再考を要求されたが、断固として拒否した。私はこれまでとってきた「造反」が社会に公然化することと拒まず、都立大学での討論集会に参加した。私は相模川のノン・ポリ学生諸君から激しい苦情が生れ、直接、間接に非難の声が聞こえてくるなかで、それに抗して1/2月一校までの授業において討論を行なつて来た。私は自分の視野、展望を広め、持つために全都助学共闘連合の諸君と緊密に連絡をとりその行事に参加している。

4

諸君も認める如く、情勢は急速に変化しつつある。権力は急速にその乗機造的後面を投げ捨て、剛構造による防壁を構築しつつある。乗機造的欺瞞性を暴露するのに「有効」であった諸戦術が、そのまま剛構造下で便用